
7人目の住人

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7人目の住人

【Nコード】

N3124Y

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

なずなは渡さん！をモットーに俺ことセナがひだまり荘で賑やかワッショイする話。

ずぶ濡れワッショイ！

「ヒロが踏めばいいんじゃないね？」

「あら、どうして？」

「いや、この中で一番重いから」

『・・・・・・・・』

ガン！

「今のはセナが悪い」

そうですか。

今紗英が言った様にまあ、俺が悪いんだろうな・・・ゆの達とみや
こも踏みながら笑ってるし。

唐突だが、ここは山吹高校に通う生徒が集まるひだまり荘。

住人は俺含め7人。

1年の乃莉となずな。

乃莉は活発でいつもなずなを引っ張っている。
兄としては助かるな。
これからも頼むぞ？

んで、妹のなずなは引つ込み思案であり自分から、誰かに関わることは出来ない。

中学でも殆ど俺にくつついていたからな。

まあ、可愛い奴だ。

もし、彼氏なんか連れてきたらそいつはまず半殺しにする。

次は2年のゆのとみやこ。

ゆのも若干なずなに似てるな。

大人しめというかなんというか。

それでも絵に対する態度は真剣で、そのことにかんしては色々と自発的に動いている。

そんなゆのといつもいるのがみやこ。

ひだまり荘の住人の中では多分一番大人びている。

体系的にしる内面的にしる。

それに絵の腕も群を抜いているからな。

みやこ以外は内容を理解するのに時間が掛かるが、それでも上手いのは確かだ。

そして飯をよく食う。

最後は俺ことセナ。

ゆの達とは違ってなずな同様普通科に通う2年男子だ。

授業なんかは殆ど聞いていないから、テストなんかは毎回赤点ギリギリだが、取らなきゃいいんだよ。

俺のことはそんなに詳しく言っても意味無いな。

次は3年の紹介という。

まずは俺を殴ったヒロ。

ケーキなんかを食うときに一々カロリーを気にする。

そして俺とみやこが体重に関すること（さっきみたいな）等と言うと瞬速の早さで鉄拳が飛んでくる。

あれ、マジで見えないからな？

次に紗英。

美術科に通いながら小説を書いている現役の小説家。

そしてそれを愛読しているのが『紗英ラブ』の・・・誰だっけ？

まあ、いいか。

とまあ、こんな具合で愉快的奴らが集まっているひだまり荘で、今俺たちは庭に集まっている。

何をしているのかと言うと、ヒロがカーテンを洗濯するために（風呂でやれば良かったと思うが）みやこのビニールプールにカーテンをぶっこみ、何故か紗英のカーテンも道連れになり、それをみやこゆのが踏んでいる。

とそこで冒頭の台詞に繋がる。

そして俺が殴られる。 ↑いまここな？

んじゃ、スタート。

「相変わらず早いな・・・達人かなんかかよ？」

「セナくんが悪いんでしょう!」

団子から伸びている髪をふよふよさせながら起こるヒロ。

いつも思ってたやっけて動いてるんだ?

「お兄ちゃん、大丈夫?」

我が愛しの妹なずなが心配そうに近づいてくる。

「おお、大丈夫だぞ。なずなは優しいな」

「えへへ」

頭を撫でると嬉しそうに微笑むなずな。
本に可愛い奴よ。

とそこで

ぐうぐうと。。。

とゆのとみやこの腹が鳴った。

「「仲いい(ですね)な?お前ら(お二人とも)」」

俺となずなの台詞がハモった。

「二人も仲いいじゃない?」

ヒロがからかう様に言ってくる。

まあ、それは流して。

「まだ朝飯も食ってないし、なにか作るか？」

「パンでも軽く焼きましょうか」

「そだな」

というわけでヒロがパンを焼き、ゆのが目玉焼きをつくることになった。

先にヒロの部屋に集まり、その時になずなが自分の部屋からハムを持ってきた。

気の利く妹だ。

と、ここで一応言っておくが、俺となずなの容姿は全く似ていない。唯一似ているのは髪くらいで、それ以外は全くだ。

ん？男と女だから当たり前か。

そうか、というか髪が似ているなら十分似ているな。

すまんな？

んで、身長は俺は175？位。

一応な？

少し待っているとゆのが目玉焼きを持ってやってきた。

「ゆの・・・それはなんだ？」

ゆのが持っている皿の上には、黄身が7つの不思議な目玉焼きがあった。

大方全員分を一気に焼いたんだろうが。

で、俺の予想は的中しており、それを見た全員の感想が

『うわぁ・・・なんか気持ち悪い』

だった。

ヒロが焼いたパンになずなが持ってきたハムを乗せ、その上にさらにゆのの目玉焼きをのせて朝食の完成となり、

『いただきます』

賑やかな朝食が始まった。

ゆのがみやこのパンを渡すと、みやこはゆのの手のかぶりつき、パンは一瞬でみやこの口の中に消えた。

「もう、みやちゃんたら〜」

引き抜かれたゆのの手にはみやこの唾液が付着していたが、ゆのは気にした様子は無い。

確かにいつものことだからな。

「ぱく」

隣でなずながパンを一口。

「美味しいか？」

「うん！卵が半熟で美味しい」

「そか。よかったな？」

「うん！」

その後も朝食は賑やかに進み、またカーテンの洗濯に俺たちは戻った。

「ねえ、お兄ちゃん？」

「ん、どうした？」

「お兄ちゃんって好きな人いるの？」

少し困った様な表情をしながらなずなが聞いてきた。

「いや、いないか？それがどうかしたか？」

「ううん・・・それならいいの」

「そうか？」

なんだろうか？

その時、ヒロと紗英を除く全員が安堵の息をついていたことに俺は気付かなかった。

汚れを取る作業が終わり、プールからカーテンを引き出す。

そんな俺の後ろで乃莉とヒロがカーテンを引き上げるのに苦労していた。

その過程で何故かヒロが四つんばいになって落ち込んでいたが。

「ねえ、お兄ちゃん。もうすぐしたら雨が降るから、先に部屋に入れた方がいいと思う」

「そうなのか？それじゃ戻るか。お前ら、雨が降るから部屋入れ」

「え、でも」

なずなが空を見上げる。

確かに晴れてるけどな。

天気はいつ崩れるかわからん。

「いいから、入って。ずぶ濡れになるぞ？」

ドザーー！！

一気に降ってきやがった。

「・・・ほれ見ろ」

「あはは」

カーテンは何とか部屋に投げ込んでいたから無事だったが、俺たちは全員ずぶ濡れになった。

部屋に上がって、カーテンをどう干すか悩んでいると、みやこがカーテンを付けた。

これは干しているんじゃないかと、カーテンのいつもの姿だが・・・まあ、細かいことはいいか。

取りあえずやつことも終わった俺たちは解散した。

ゆの・みやこ・なずなは2階の部屋。

俺・紗英・ヒロ・乃莉は1階の部屋。

ちなみに俺の部屋は301号室だ。

「ホント、ほんの些細なことで盛り上がる奴らだよな？」

次はどんな出来事があるのやら。

食堂

「それで？お前は相変わらず妹LOVEな訳？」

「は？なに当たり前のこと言ってるんだ？」

「はあ、ホント相変わらずなのね・・・」

からかう様に聞いてきた男子はジロウ。

俺と同じくらいの背丈に、黒髪のウルフヘアで目も黒い。知り合ったのは高校に来てからだ、以外と気が合った。

趣味が同じとかでもないし、共通点なんかも殆どないのにな・・・。不思議なもんだ。

呆れた様に溜息をつきながら言っただのは春。

小柄な体格で頭一つ半分くらい小さく、長い蒼髪に紅い瞳。こいつはジロウの幼なじみで、自然と知り合った。

二人とも中々おもしろい奴だ。

今は朝の教室でHRが始まる前の空き時間。

大体朝はいつもこうやって過ごしている。

やがてチャイムが鳴り、担任が入ってきて、今日の予定を面倒くさそうに話した。

それでいいのか担任よ？

話も終わって最初の授業である生物を受けるべく生物室に向かう途中、ジロウが聞き捨てならないことを言ってきた。

「何日前に、なずなちゃんが男子生徒一緒に歩いてたの見たって奴がいるぜ？」

「は？」

なんだと？

「どこの誰だ？そいつは？何年何組だ？」

「おい、まてセナ。お前なにするつもりだ？」

「あ？半殺しに決まってるだろ？」

「いやいや！待てよ！発想が飛躍しすぎだからな！？」

「そうよ！落ち着いて！」

「これが落ち着いていられるか！家の可愛い妹を誑かそうとする奴は俺が許さん！」

ブブブ・・・。

ち、誰だこんな時に！

そう思いながら見た携帯のディスプレイには『なずな』の3文字があった。

急いで通話ボタンを押す。

「どうした、なずな？」

『お兄ちゃん、今日お昼ご飯は食堂で食べようってゆのさん達がつてたけど、来る？』

「勿論だ。当たり前だ。行くに決まってる。絶対行く」

『うん、それじゃ』

「ああ」

なずなから通話を切って、俺は携帯をポケットに仕舞う。

「さて、行くぞ？」

「ん？怒りは収まった「ジロウ、しっ！」おおと・・・そうだな」

「ん、なんだ？」

「いや、何でもない。早く行こうぜ？」

「ああ」

生物室に向かって、程なくしてチャイムが鳴り、いつもの様に授業を過ごした。

「寝てるだけでしょ？」

いつもということに変わりはない。

「少しは改善しなさいよ」

無理。

というかモノローグに突っ込むなよ。

お前はエスパーか？

「誰がエスパーよ？」

「お前だよ。何ださつきから？俺の心の中の言葉に一々反応しやがって」

ちなみに小声で話してる。

「いやなら起きてなさいよ」

「それが出来たら苦労しない」

「・・・なずなちゃんが悲しむわよ？」

「!?!」

何だと？

「兄がいつも授業中寝ているなんて知ったら、なずなちゃんどう思

つかしらね？きつと悲しむわ」

「じゃあ、起きてる」

「よろしい」

その日俺は一日の授業を一切寝ずに過ごしたから、そのことが職員室で噂になったとかなんとか、とは後にジロウから聞いたことだ。

昼休みになってすぐ、俺はなずなを迎えに行って食堂に向かった。

途中で乃莉と合流して3人で食堂へ向かうと、真ん中辺りに既にゆの達^がいて近くの席には紗英ラブの夏目がいた。

「うつすお前ら。待たせたな？」

「あ、セナ。やっと来たあゝ」

「なんだ？みやこ、お前食わずに待ってたのか？」

みやこの前には既に飯があるが、まだ一口も食っていないみたいだ。湯気は出ているから、多分まだそんなに時間は経っていないだろう。

なずなと乃莉の分も俺が買い行こうとしたら、なずなも付いてきた。

座って待っててもいいだんぞ？と言つと

「うつん、お兄ちゃんと一緒にいたいから」

と極上スマイルで言ってくれた。

もう、兄ちゃんはそれだけで満足だよ。

思わず目頭が熱くなったじゃないか。

歩きながら頭を撫でると嬉しそうに目を細める。

俺となすなはカレーを買い、乃莉の分のオムライスを買って席に戻る。

「お待ち」

「あ、ありがとうございます」

席に着いて、みんな揃った所で手を合わせる。

別に学食でもこれをする必要は無いと思うんだがな……。

まあ、いいか。

「今日はセナは何があつたの？」

「ん？まあ、特に何もなかったな……。強いて言うなら午前の授業は寝なかった」

「……え！？」「」

紗英の質問に答えると、なすなと乃莉以外の4人が同時に驚いた。

「そんなに驚くことなんですか？」

乃莉が疑問に思ったことを聞いた。

「だって！セナくんっていつも授業寝てたんだよ！なにがあったの！？」

「そうだよ！授業で寝ないなんてセナじゃないよ！」

「お前の俺に対する認識はどうなっているんだ？」

本気で気になるんだが？

「そりゃ、いつものあんたを知ってたらね」

だから心を読むなつての。

「はいはい」

丁度いいタイミングで通り掛かった春に心で言うとお奥に去った。

「綺麗な髪ね・・・今の子。セナくんの知り合い？」

「ああ、クラスメイトだよ」

ヒロの質問に答えて、カレーを一口。
うん、美味い。

「どんな人なの？」

「心を読む」

「はい？」

まあ、そうなるわな？

「どういうこと？」

「まあ、細かいことは気にするな」

ゆのにそう言つと今度はなずなが問いかけてきた。

「その人、お兄ちゃんとどんな関係？」

「ん？単なるクラスメイトだよ」

「それなら良かった」

安堵の息を吐くなずな。

「なにだが？」

「あ、うつん。なんでも無い」

「」「ほっ・・・」「」

何かゆの達も似たような反応だが、どうしたんだろうか？

飯の時間も終わり、惜しいが教室に戻らなければならなくなった。

「何かあったら、すぐに言っただぞ？なずな。兄ちゃんすぐに駆けつけるからな？」

「うん」

「セナ、心配し過ぎだよ？大丈夫だって」

「何を言うか。可愛い妹を心配しない兄がどこにいる？」

「・・・それはまあ、そうだけど」

「紗英も知花ちゃんのことがか心配だもんね？」

「な、なに言ってるのよ！／＼／＼」

一気に顔を赤らめる紗英。

確かに紗英と知花も仲いいから・・・心配してないつもりなんだろうが、丸わかりだ。

「それじゃあね？お兄ちゃん」

「また放課後に」

「ああ、妹を頼むぞ？」

「任せて下さい！」

乃莉になずなを託し、俺たちもそれぞれの教室に戻った。

「じゃあな？ゆの、みゃこ」

「うん」

「またね」

2人と別れて、自分の教室に戻る。

「おう、セナ。楽しんだか？」

教室に入るなりジロウが聞いてきた。

「当たり前だ。なずながいれば俺はどこでも楽しいさ」

「シスコン」

「違うね。なずコンだ」

「そうですか・・・」

ボソと呟いた春の言葉にそう返すと、はいはいと軽く受け流してまた本を読み始めた。

ジロウと駄弁りながら、昼休み終了を待ち、授業が始まって、残り二つの授業も寝ずに今日は終わった。

帰ってからは、またいつものように全員でわいわいやった。

今日も楽しかったな。

花見

なあ、春。

「ん〜？」

お前なんで俺の部屋にいんの？

「暇でぶらぶらしてたら、いつの間にか学校まで来てたからついでに寄ったのよ」

いや・・・ゆの達の所の方がよくないか？知らない仲じゃないだろ？

「2階に上がるの面倒じゃない。それにあんたの部屋ならゲームもあるし。ていうか心じゃなくて口使いなさいよ」

「別に会話は成立するんだからいいじゃねえか？楽し」

「確かに今あんた同時に面倒とも言ったわね？」

なんで分かるんだよ。

というわけで、今日は土曜日。

学校は休みだ。

昨日夜までゲームしてたから寝るのが遅くなったが、インターホンで起こされた。

出てみるとこいつがいたと言うわけだ。

つか、暇ならジロウと遊べばいいものを。

何も俺の所じゃなくても良いだろうに・・・他の友達だっているんだからな。

ちなみに現在時刻は11時30分ジャスト。
そろそろ腹が減ってきたな・・・。

ピンポン

「ん？はいはい」

ベッドから起き上がって、ドアを開けるとなずなと乃莉がいた。

「おはようお兄ちゃん」

「おはようございます」

「ああ、おはよう愛しの妹に可愛い後輩よ。まあ、入れ」

「「おじゃましまーす」」

招き入れて居間に案内する。

「あ、春さん。おはようございます」

「おはよう、なずなちゃん。あら、その子もしかして」

なずなと春が挨拶を交わし、この人誰？といった感じの表情をしている乃莉を見て春が、予想？する。

「ああ、なずなの友達の乃莉だ。こうして会うのは初めてだよな？」

「そうね。わたしは春。セナのクラスメイトよ？よろしくね？乃莉ちゃん」

「あ、乃莉です。こちらこそよろしくお願いします」

2人とも丁寧だな・・・こんな面倒な挨拶しなくてもいいと思うが。

「ん？」

「いや、何でもない。それで？どうしたんだ？」

「あ、えつとね？ゆのさん達がみんなでお花見しようって言うて、お兄ちゃんはどうするか聞いて来てって」

「成る程な。もちろん参加するぞ？どうせならお前も来いよ？暇なんだろう？」

「失礼ね。でも、いいのかしら？」

「いいんだって」

少し遠慮がちな春を半ば強引に連れて行くことにして、俺たちはヒロの部屋に集まった。

もしかしたら疑問を持っている奴がいるかも知れないから、一応言っておく。

ヒロと紗英のことは1年の頃から呼び捨てだ。

2人とも別に敬語じゃなく良いとも言っていたからな。

インターホンを鳴らし、来たことを告げると、

『はい』

とヒロのおっとりした声が聞こえて、程なくして出てきた。

「おはようセナくん。あら？そちらの方は？」

「覚えてないか？この前食堂でお前が綺麗な髪って言って奴だ」

春を見て疑問を浮かべるヒロに直接言わず、ヒント形式で言う。

「・・・ああ、あの子ね。おはよう、わたしはヒロ。よろしくね？」

「春です。よろしく願いします」

その後部屋に招かれ、ゆの達も同様に挨拶して、話を進めていく。

まあ、庭でわいわいやるうぜってことだからな。
そんなに準備なんかも必要ないが。

ビニールシートを持って庭に行き、ヒロが作った料理を持ってくる。

「お前何時に起きたんだよ」

そう思うほど、量は多かった。

重箱もしっかりいっぱいになっているし。

「なんだか早く目が覚めてね？珍しく寝ぼけなかったのよ」

「マジか？雨でも降るんじゃないの？」

どういう意味よく、と頬を膨らませるヒロは放置して、俺たちは手を合わせて食事を始めた。

皆思い思いの品を皿に取っていく中、春はどこか所在なげにしていた。

箸が止まっている。

「食わないのか？」

「え？ああ・・・」

「もしかして苦手だった？」

「いえ！そういう訳では・・・」

ヒロの言葉を慌てて否定する春。

「唯、こういった雰囲気慣れていなくて・・・」

「んなこと気にすんなよ。いつものお前でいればいいんだって。ほら、食べ」

適当に春の皿に料理を乗せていく。

まあ、体重のことは気にするな。

ガン！

「いつてえゝゝゝそれでいいんだよ。ほら」

頭を抑えながら食べることを促す。

皆はいきなり春が俺を殴ったことに驚いているが、そのことはまた後ほどってことで。

春は躊躇いがちに料理を口に運ぶ。

「・・・あ、美味しい」

「ヒロさん料理はいつも美味しいんだよ？あたしもしょっちゅうお世話になってるし」

「みやちゃん、いつもよく食べるもんね？」

「うん！」

「太りますよ？」

「気にしない！」

胸を張るみやこ。

確かにみやこはいつもよく食うが、全然太ってるようには見えないからな。

むしろ、このメンバーの中では一番発育がいいと思う。
背も結構高いしな。

ま、それはともかく。

お前はいつものお前でいればいいさ。ここなら何も気兼ねしなくていい。

心の中で言うと、隣で小さく頷く春。

この日を切っ掛けに春はよくひだまり荘に来るようになったが、それはまたの機会だな。

2時頃まで賑やかに過ごして、片付けを始め、みなそれぞれの部屋に戻った。

春はまだ帰らないらしく、みやこが誘ったから、みやこの部屋に行った。

「楽しくやれよ?」

呟いて、俺も部屋に入った。

初日

「俺はセナ。今日からここに住むことになった。よろしくな?」

「よろしく」

「よろしくね?」

「男の子が来るのは初めてよね?」

「うん。ていうか男子禁制じゃなかった?」

そう、ここひだまり荘は身内を除いて男子禁制となっているが、毎年301号室が埋まらないからこの際、男子でもいいじゃね?といった感覚で、俺はここに住むことが出来るようになった。

まあ、実際俺も来年からは身内の男になるからな。

荷物はそんなに多くないから、時間がある時に整理することにして、周囲を見て回ろうと思い、外に出た。

「あれ、セナくんどつかいくの?」

上から声が聞こえた見上げると屋根にみやこがいた。

「ああ、適当に散歩をな」

「道わかるの?」

「知らない方が楽しいだろ？」

「ああ、確かに。あたしも行っていていい？」

「構わないぞ？」

答えるとおちよつと待っててー！と言って、器用に屋根から降りて自分の部屋に入っていた。

門で待っていると、階段から賑やかな音が聞こえてきた。振り向くと髪をおろしたままのみやこがいた。

まずは当初の予定通り、適当に歩く。

ひだまり荘のことなんかを色々聞きながらすすみ、商店街に着いて本屋やゲーム屋、いろんな所を回った。

まあ、本当に適当に進んだから、結果

「迷ったな」

こうなった。

陽もすっかり沈んで、辺りは結構暗くなっている。

「どうする？あたしも道覚えてないよ？」

「んゝ・・・取りあえず連絡はしておくか」

携帯を取り出して、紗英に迷ったが心配するな。みやこも一緒だと

メールを送る。

ダダダーン！とベートーヴェンの曲が鳴り、着信を告げ、出てみると紗英だった。

『何が心配するなよ！今どこにいるの！』

「いや、だから迷ったんだって。どこにいるかも分からねえよ」

『あのねえ！』

「大丈夫だって。みやこの安全は保障するから。じゃあな？」

『あ、ちよっ』

携帯を閉じてポケットに仕舞う。

「取りあえず、来た道を戻ろうぜ？そのうち着くだろ」

「おっけ～。はくしゅっ！うっ・・・ちよっと冷えてきたね？」

みやこは半袖のまま出てきたからな。

確かに大分冷えてきた。

4月とはいえ、陽が落ちると寒い。

来ていたジャケットを脱いでみやこに差し出す。

「え？」

「着てろ。半袖よりは遙かにマシだぞ？」

「いいの？」

「おう。俺はこの通り下も長袖だからな」

「・・・じゃあ、借りるね？」

ああ、と返事した俺の手からジャケットを受け取る。

「あつたかい。ありがとう、セナくん」

ニコニコしながら俺に礼を言ってくるみやこ。

「どういたしまして。それじゃ、いこうぜ？」

「うん。あ、手繋がない？あつたかいよ？」

「お、そうだな」

どちらからともなく手を出して、繋ぎあうと、そこからじんわりと熱が伝わってきた。

歌を歌いながら手を元気に振るみやこに合わせて、俺も手を振る。高校生にもなつて何をしているんだろうな？俺たちは。

ま、悪い気はしないが。

「ふんふんふふ〜ん」

なんの歌かは分からないが、楽しそうだからいいか。

暫くそうして歩いていると遠くに灯りが見えた。

多分商店街だろう・・・どうやら、真っ直ぐ突き抜けていただけみたいだ。

「そういえば、セナくんって妹がいるって言ってたよね？」

「ああ。内気な奴だが、可愛くてな・・・正直言って離れたくなかったが、来年になればまた毎日会えるからな」

「てことは山吹に来るんだ？」

「ああ。そのときはよろしくな？」

「お任せあれ」

空いている手を上げて元気にそう言うみやこ。

あだ会ったばかりだが、こいつは見た目とは裏腹に内面が幼い部分がある。

今みたいにやるのもそうだし、手を振る所もそうだろう。

だが、それがこいつの魅力なんだろうな。

商店街に入り、手を離すのかと思ったたらそのまま進んだ。

途中でみやこがコンビニに寄りたいと言ったので、寄って、ジュースと菓子をいくつか買った。

店を出ると、正面から蒼い髪の女の子が歩いてきていた。後ろにはおそろく遅れているであろう男も。

なにやら男の方が待てよ、と言っていたが、女の子は全く無視して進み中に入っていた。

特に気にもせず、俺とみやこはまたひだまり荘に帰るべく歩き出した。

数十分してひだまり荘が見えてきて、外にはゆの達がいた。みやこを見つけてゆのが駆け寄ってくる。

「みやちゃ〜ん」

「ゆのっちゃん」

「悪かった。俺がもっと注意しておくべきだった。紗英も悪かったな？」

「うっん。ちゃんと帰ってきたならそれでいい。みやこも何とも無いみたいだからね」

「そのジャケット、セナくんが貸してあげたんでしょう？偉いじゃない」

「そうだろうか？」

部屋に戻ろうとすると、ヒロ達に呼び止められた。

なんでも晩飯と一緒に食うそうだ。

断る理由も無いから、俺は了承して、一緒にヒロの部屋におじゃました。

「セナくん、これありがとう。今日は楽しかったよ?」

「ああ、俺も楽しかったぜ?ただ、まあ・・・悪かったな?迷っちゃって」

「ううん、楽しかったから。また今度、どこか行くときは誘ってね?」

「ああ」

その後、ヒロの料理を食ったが、かなり美味かった。

聞けば紗英の体調管理をするようになって、自然と上達したそうだ。

良い奴だ。

初日から、道には迷ったが、楽しかったな。

なずな、ここは良い所だぞ？

なずなの気持ち

「セナさんって、いつからなずなをそんなに大事にするようになったんですか？」

「最初からだか？」

食堂でなずな達と飯を食っていると、乃莉が尋ねてきた。

「最初からって？」

「生まれた時から」

「じゃあ、面倒も見てたの？」

ヒロの質問に答えると今度は紗英が聞いてきた。

「ああ。風呂に入れたり、おしめを替えたりしてな。あの時も本当に可愛かったぞ、なずなは」

「じゃあ、今は？」

「可愛いに決まってる」

「お兄ちゃん／＼」

なずなが顔を紅くしながら制服の裾を掴んでくる。
またその仕草が可愛いな。

しかも上目遣いって・・・そのコンボは反則だろ？

「恥ずかしいよ／＼」

「あはは。確かにそうかも。でも、セナくんってホントになずなちゃんを大事にしてるよね？
寝るのも一緒だったりしたの？」

「ああ」

「ちなみにいつまで？」

「中1までは一緒だったけど……ある日突然、今日から別々で寝るって言われた。理由を聞いても教えてくれなくてな」

「ああ！すいません！そんなに落ち込むとは思ってませんでしたから」

言いながら落ち込んでいく俺にそう言う乃莉。

その時になずなが小さく何か言ったが、小さすぎて聞き取れなかった。

みんなにも聞こえなかったみたいだ。

「まあ……俺も妹離れをする時期が来たのかな、と思って、なんとか耐えたけど……しばらくはベッドの中なのに寒かったよ。
何せ、13年間隣で感じていた温もりがなくなっただけだから……」

「……………」

「でも、なずながどこかに行った訳じゃないんだからさ。今も隣にいるんだし」

隣を見ると確かななずながいる。

何か考えているのか、その横顔は真剣だった。

飯も食べ終わり、それぞれの教室へと帰る。

午後の授業も終わってひだまり荘に帰り、着替えてベッドへダイブ。

「ふう・・・今日も春は絶好調だったな」

心読まれまくった。

数分したら、ゆの達も帰ってきたのか、賑やかになり始めた。

飯をまたヒロの所で食って、部屋に戻った後、ゲームでもするかと思っ
て、何をしようか考えていると、インターホンが鳴り、来客を告げた。

「はいはーいっと・・・」

ドアに向かい、開けるとなずながいた。

若干顔が赤いが・・・まさか。

「なずな！熱でもあるのか！」

「え？うん、大丈夫だよ？」

「本当か？どこも辛くないか？」

「うん」

「そうか・・・なら良かった。けど、一応確認な？」

「え？ひゃっ／／／」

額を合わせて熱を計ると、まだ少し熱いが、熱ではなかった。

うん、どうやら本当に大丈夫みたいだな。

「それで、どうしたんだ？」

「うん・・・取りあえず中に入って良い？」

「ああ」

招き入れて、ベッドに並んで座る。

「お兄ちゃん・・・わたしが離れた時、寂しかったの？」

突然なずなが聞いてきた。

昼間のことだろうか？

「・・・まあな。ずっと一緒だった訳だし・・・なあ、なんでいきなりあんなこと言ったんだ？」

俺はそれが気になっていた。

「・・・保たないと思ったから」

「保たない？」

「うん。ずっとお兄ちゃんの隣で寝てたから、日に日に格好良くな
っていくお兄ちゃんを見てたら、心臓がドキドキしっぱなしで、抑
えられなくなりそうだったから。こうして話している今も、ドキド
キしてるの。お兄ちゃん、これってなんなのかな？」

本当に分からない様で、その目は縋るようだった。

それは多分、ある感情の芽生えなのかも知れない。

だが、それを教える訳にはいかないだろうな・・・。

「悪いな？俺も分からない。だが、大丈夫だ。いつか分かる時が来
る」

「そうなのかな？」

「ああ、きつとな」

一応それで納得したみたいで、その日俺たちは久し振りに一緒に寝
ることにした。

「お兄ちゃん・・・ドキドキが強くなった」

「大丈夫だ。明日起きたら収まってるから、心配せずに眠れ」

「うん。お休み、お兄ちゃん」

「ああ」

なずなはゆっくりと夢の中に旅立っていった。

できれば、その感情は自覚しないままできて欲しいな・・・辛いだろうが。

すまん、なずな。

炬燵

「おー！かなり積もってる！」

「みやちゃん、風邪引くよ？」

「これはすごいね」

「ホントねえ」

本日12月29日。

朝起きてみれば、辺り一面銀世界となっていた。

みやこは見るなり雪に突っ込んでいき、ゆのは微笑みながらその光景を見ており、紗英とヒロは寄り添い合ってその光景を見ている。

俺は玄関から顔だけ出してガクガクブルブルしている。

寒いのは苦手なんだよ・・・マジで。

というわけで俺は部屋に亀のごとく引っ込むことにした。

こういうときは猫よろしく炬燵で丸くなるに限る。

冷たい床を歩きながら炬燵に入る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だが相変わらず寒いままだ。

「スイッチ入ってねえし・・・」

数分無駄にした。

スイッチを入れてまたしばらく待つと、すこしずつ暖かくなってきた。

炬燵はあれだな・・・動きたくなくなるな。

「あつたけえ・・・」

ピンポン

「セナー！遊ばー」

インターホンと同時にみやこがドアを開けて元氣に入ってきた。
頼むから閉めてくれ！凍える！
やっと暖まってきたのに・・・。

「ねえ？セナ、遊ぼうよー」

駄々っ子よろしくぐいぐいと引っ張ってくるみやこを、微笑みながら見て、ゆの達も入ってきた。

「頼むならそんなに引っ張らないでくれ。ただでさえ寒くて動けねえつてのに」

「あれ？セナって寒いのだめなの？」

「ああ、全く以てな」

「へえ、なんか意外」

「そうか？」

寒がりなのを意外と思われたのは初めてだな。
あれ？なんかゆの達が炬燵に入ってる。

まあ、いいか。

それを見てかみやこも隣に入ってきた。
確かに空いてないが。

あ、でも隣に誰かいるとあつたけえ……。

「セナくん、朝ご飯はもう食べたの？」

「ん？いや、まだ」

「なら、今から何か作るわね？何かリクエストある？」

ヒロの質問に答えるとそう言って立ち上がる。

「……暖まるやつ」

「わかったわ。材料取ってくるから、台所使わせてもらっわね？」

「いや、冷蔵庫に入ってるの使っていいぞ？作ってもらっんだからな」

わざわざそこまでしなくてもいい。

それで納得はしたのか、ヒロはじゃあ、使わせてもらっわね？と言って、冷蔵庫から材料を取り出して棚から器具を取り出し、調理を始めた。

うまそうな匂いが漂ってくる。

ぐうつうつ・・・と、隣から腹の鳴る音が聞こえてきた。

「なんだ、おまえも食ってなかったのか？」

「うん、だって雪がすごかったし」

それ何の関係もなくなっけ？

とは思ったが、どうやらゆのたちも同じみたいだ。

「ヒロ、全員分って作れるか？」

「大丈夫よ？最初からそのつもりだったから」

さすが、主婦。

暫くすると、ヒロがうまそうな料理を持ってきた。

「うわぁ、美味しそう」

「「さすがヒロ（さん）」」

ゆのは目を輝かせ、みやこと紗英は俺と同じことを言っていた。

現ひだまり荘全住人で朝食を始める。

「美味かったあ・・・サンキュ、ヒロ」

「いえいえ」

「よし！それじゃ遊ぼう！」

「なぜにそうなる？」

食い終わった途端元気に立ち上がるみやこ。

ゆの達も賛同しているのか、立ち上がったるし。

「もう少し休ませてくれ。食ったばかりじゃ無理」

「じゃあ、遊んでくれるの？」

「ああ。遊ぶから」

「じゃあ、少しだけ待つね」

また隣に座るみやこ、ゆの達は先に外に行っていると言って出て行った。

「はあ・・・炬燵って暖かいよね」

「そうだな」

なんか眠くなってきた。

炬燵とヒ口の飯の組み合わせは眠くなるな。

それから俺は、少しみやこと話している内に寝てしまった。

「あれ？寝ちゃったのか。ふふ、お休みセナ」

なんだか懐かしい感覚を感じながら。

太鼓アタック！

「それで、なに見るのよ？」

「行って決めればいいだろ・・・なんか一つくらい面白そうな物はあるさ」

「それもそうね」

本日も土曜日。

つまり学校は休み。

その休みの日、俺は先日春とジロウの2人と一緒に遊びに行くという約束をしたのだが、ジロウの奴がドタキャンしやがって、俺と春の2人になってしまった。

まあ、文句は明後日言うことにして、いない奴のことは忘れ、俺と春はとりあえず映画でも見ようということになり、映画館に向かっている。

なずな達にはメールで知らせておいたからいいが、折角の休日にならずなと過ごせないとは・・・いや、それなら約束しなければ良かっただけなんだがな？

どうにも寝惚けていたみたいで、気付いたら行くことになっていたんだ。

道中他愛のない話をしながら歩き、映画館に到着した。

「なんかあるか？」

「ないわね。ゲームセンター、行きましょう？映画よりは面白いわ」

「それもそうだな。俺も特に観たいと思う映画はないし。対戦でもするか？」

「ええ。あれ、やりましょうよ・・・あの太鼓叩いて、敵を倒すやつ」

「おう。一匹も逃がさねえからな？」

「もちろんよ」

結局何も観ずに映画館を出て、俺たちは近くのゲーセンに向かった。

「うし！やるか！」

「ええ」

投入口に金を入れて、バチを取って太鼓に向かうと画面がタイトルから難易度選択に切り替わった。

難易度は『イージー』『ノーマル』『ハード』『超ハード』の4段階になっている。

何故4つ目だけ、超は漢字なんだ？

まあ、いいか。

「『超ハード』と」

カカカカン！ドン！

全く同じ動きをして選択すると、画面に『本当にいいですか？』という確認が出た。

「もちろん」

ドン！

はいを叩くと今度は『後戻りできませんよ？いいですか？』と出てきた。

「くどい」

ドン！！

さつきよりも強く叩くとやっと思まった。

その時に後ろから何か本当にやるつもりか？とかいう声が聞こえてきたが、俺たちのことじゃないだろうと思ひ、聞き流した。

「さて・・・狩りをはじめ（ましよう）か」

画面の奥や左や右や上から下から次々と現れる、モンスターを演奏に合わせて太鼓を叩きぶちのめいしていく。

このゲームは難易度が『ハード』までなら画面の横にゲージがあり、叩く場所が示されるが、『超ハード』ではそれが無い。

つまり、邪魔なゲージが存在しないから敵に集中できる。

「なあ、春」

「なに？」

太鼓を打つ手は止めないまま、春に話しかけると、春も叩く手を止めずに顔だけをこちらに向けた。

「これが終わったらなにするよ？」

「うーん・・・まあ、あと一曲終わってからでいいんじゃない？」

「それもそうだな。にしても、あれだな？」

「ええ。超ハードって言うから、どれ程かと思ったけど」

「大したことないな（わね）」

ドドン！！

最後に二回連続で叩いて敵を全滅させると、画面に大きくPERFECT!の文字が出てきた。

「はいはい、それはいいからさっさと次の曲を始めろ」

「どうでもいいことに時間取りすぎなのよ」

太鼓を適当にドンドン叩きながら次の曲が始まるのを待っていると、後ろから誰かに肩を軽く叩かれた。

振り向くと、そこには

「やつほー！セナ&春さん！何してるの？」

みやことゆのがいた。

みやこの質問に答えると同時に二曲目が始まり、俺と春は2人と会話をしながら太鼓を叩いていた。

「映画を観ようと思ったんだが、なにも面白そうな物がなくなってお前達はどうしたんだ？」

「絵の具が切れて買いに来ただけど、みやちゃんが少しゲームをしたって言い出して」

「それで、来てみたら人ばかりが出来てて、観てみたら」

「わたし達だったのね。それにしても、なんでこんなに人が集まってるの？」

「まあ、いいんじゃないか？何かイベントでもあるんだろ」

「ふーん・・・それだけでこんなに人が集まるなんてね。ゲームセンターの将来は安泰ね」

「だな」

「2人とも全然気付いてないね？」

「うん。あのゲームって太鼓のプロがやっても1人か2人がギリギリでクリア出来るレベルなのにな？」

「そうなの!？」

なにやらゆのとみやこが話していたが、俺たちは気にせず敵をぶちのめしていった。

二曲目もPERFECTでクリアした俺たちはその後、ゆのとみやこも加えてクレーンゲームをしたりして遊んだ。

「結構楽しかったな」

「そうね。これ、ありがとう」

「おう。それくらいならいくらでも取ってやるぞ?」

「その時はまた頼むわ」

「あたしも取って」

「わたしも」

「おう」

夕陽に染まる路を歩き、俺たちはひだまり荘へと帰宅した。

ちなみになずなにぬいぐるみのおみやげを渡すと

「うわぁ！ありがとう！お兄ちゃん！」

勢いよく抱きついてきた。

今日は良い夢が見れそうだ。

褒め言葉

「あ、紗英大好きっ娘夏目」

「っ！ちよつとセナ！いきなり何言ってるのよ！？」

「いや事実だし」

食堂への移動中、後ろ姿を見つけて聞こえるかどうか位の声でつぶやいたが、ハッキリと聞こえていたようで、すぐさま反応してきた。紗英関連だったら何でもこいつの耳に入るだろうな・・・。

「少しは進展したのか？」

「進展？何がよ？」

「メアドとか電話番号とか、聞いたのか？」

「そ、そんなこと、出来るわけないでしょ！／＼／＼」

「どんだけシャイなんだよ。」

「純情とも言っのか？」

「まあ、大丈夫か。」

成り行きで横に並び授業やらなんやらの話をしながら食堂に向かい、途中で俺が1日だけ授業を寝ないで過ごしたことがあるということ

を、適当に言ってみたら

「それこそ寝てたんじゃないの？」

なんて言っ てきやがった。

「そんなに意外か？」

「そりゃ、職員室であんたがずっと寝てることについて話していた先生までいるくらいだからね。あんた、一年の時からそうでしょ？初めて寝たのはいつなの？」

「始業式が始まる前の教室で席に着いた瞬間」

「はあ・・・それでよく友達が出来たわね？」

「出会いはある意味最悪だったと思うけどな。寝てたら教科書の角でいきなりぶたれたんだぞ？」

「ふゝん。それって、あのウルフヘアの？」

まあ、普通そう思うよな。

俺もあれは女の力とは思えなかったよ・・・。

「いや、春」

「ああ、なんか納得」

「なんだそれ」

「別に」

程なくして食堂に到着するとなずなが駆け寄ってきた。

「お兄ちゃん」

「おお、愛しの妹よ。元気だったかー？」

「うん」

勢いのまま抱きついてきたから俺も抱き返した。

それを見た夏目の一言が

「シスコン」

だったとき。

「ふん！最高の褒め言葉だ！」

「はあ・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3124y/>

7人目の住人

2011年11月17日18時26分発行